

たまいたま 川柳



ハナミズキ

2019年
10月号 (No.719)

日川協加盟

巻頭言

上善の水といふこと

願法みつる

為政から個の生き方を説く、「上善は水の如し」との箴言は、無為自然が「不争の徳」に結びつく哲学である。ところで、近年の日本列島への降雨量の異常な現象に、心を痛めつけられる。そして未知の大地震や津波に怯える。干天に受ける甘露の一杯の水は、生きとし生けるものに命を与えてくれる。一方、天地をも押し崩し流す濁流には、不善の姿を見るのが庶民的な感覚ではないのか。箴言では、不争のシンボルとしての倫理観を述べているだけなのだが、我欲のニンゲンには、水からの恩恵ばかりを無償で希求し、不幸には末代までも怨嗟する。水なくては動植物は生きられず、建造物も得られない。地球上の、そして日本列島の全ての川辺・水辺・湖沼について、その保水と利水の知恵を理解しなければならぬ。しかし有意人造の市街地や工場地にはかり転化した環境変化は、上善たるべき水の特質を失わせている。豪雨や津波の度に、人間は蟻ンコのように苛まれる。自らが原因発生者であることを忘れて。国土が潤いを失う環境になると、保水性を失ってゆく。瑞穂の国は豊かな田畑の姿であってほしいものだ。今や、甘露の水はおろか、汚濁の水を飲む観ばかりである。

日日是好

願法みつる

泣いて知る水の怖さと有り難さ

低地帯棲むには知恵がたとえ要り

地下水一滴の宇宙の大輪廻

だからさーナニガなんだと井の蛙

深呼吸流される身の浮き袋